

茶の湯文化学会会報

No.95

第95号 / 2017年12月22日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

茶の湯文化学会 第四十回訪越団 研修記 石井智恵美

一日目 成田空港、関西空港、福岡空港からお集まりの皆様がベトナムのハノイノンバイ国際空港で集合して、バスでハノイ市内に出发したのは現地時間で一四時三〇分（日本時間では一六時三〇分）。日本とは二時間の時差がありました。ハノイのお天気は曇り。湿度が高いというよりは、空気が水を含んでいると感じるほどの蒸し暑さでした。汗が一気に噴出しましたが、それで体温の調節ができるのか、研修中に体調を崩すような方もいませんでした。

季節は雨期で、田んぼの青々とした稲や大きく育った街路樹など、緑豊かな景色の中を、車窓よりホーチミン廟、国会議事堂、迎賓館などを見ながらベトナムでの最初の見学先である文廟に到着しました。文廟はいわゆる孔子廟で一〇七〇年に建立されました。文廟門（三閔門）を入ったところから始まるオレンジ色の道にはパッチャン焼きの煉瓦が敷かれています。この道を進んでいくと、孔子像が祭られている大聖殿に行き着きます。一〇七六年にはその敷地内にベトナムで初めての大学「国子監」が設置されました。ここには科挙試験の合格者の名前と出身

地が刻まれた石碑があり、これは二〇一一年に世界遺産に認定されました。ちなみに文廟は二〇一三年に世界遺産に登録されました。その後、ハノイ市民の憩いの場でもあり、亀にまつわる伝説のある美しいホアンキエム湖の周辺を散策して初日はホテルに早めのチェックインとなりました。

二日目はホテルを七時に出発。タイ湖（西湖）に蓮茶の原料となる蓮の花を見に行きました。蓮の花の開花時期は六〜七月で、早朝の開花する直前の蓮の花が採取されていました。蓮の花の香りは、開花するほどどんどん薄くなっていってしまうのだそうです。ちなみにピンクの蓮の花はベトナムの国花です。タイ湖では蓮の花を背景にアオザイを着た女性の写真撮影会がこちらこちらで行われるなど華やかな雰囲気にも含まれていました。

その後、場所をハノイの旧市街にある蓮茶の製造所へ移動して製造工程を見学しました。蓮茶を作るのに必要なのは蓮の花の雄しべの先端にある葯（やく）の部分です。これが蓮の香りの元であり、形や色が白いお米に似ているので、通称、「米」と呼ばれています。

この「米」だけを集めてベトナムの高原で採れる上質な緑茶に混ぜ、二十四時間放置して香りをお茶に移します。その後、「米」とともに八〇度でお茶を煎り、放冷後また新たな「米」を混ぜて二十四時間香りをお茶に移すという作業を七回繰り返し返します。蓮茶が出来上がるまでには十五日間かかるということでした。このように手をかけて作られる蓮茶は、昔は王様の飲み物だったそうですが、今でも高価なためお正月や結婚式、特別なお客様の時などに用いられるそうです。



蓮の雄しべの先端の葯

午後はベトナム陶磁器の産地であるバッチャン村に行きました。バッチャン村はハノイ市内からバスで四十五分ほどのところですが、ここで焼かれている陶磁器、バッチャン焼きは、かつては安南焼きと呼ばれ、日本の茶人に愛されました。今回は「ミン ハイ セラミック」という工房を見学しました。バッチャン焼きには染付け（青い絵柄）と、セラドングリーン（薄い緑色で無地）と赤絵（赤い絵柄）の三種類あるそうですが、日本人に好まれたのは染付けだったそうです。かつての安南焼きには細かいヒビやにじみが入っていました。現在のバッチャン焼きにはヒビもにじみもなく滑らかな美しい絵付けがなされています。バッチャンではかつての安南焼きに見られたようなヒビやにじみを再現する試みが始まっているそうです。

このバッチャン村の南隣のキムラン村もバッチャンと同じく高級陶磁器の産地であった事が近年、日本の考古学者、西村昌也氏等によって実証されました。きっかけは二〇〇〇年にキムラン村に接する紅河の川岸が河水によって削り取られたことで過去の集落遺跡が露頭した事だったそうです。二〇〇一年から始まった発掘調査によってキ



バッチャン焼きの工房



キムラン陶磁器歴史博物館

ムラン村での陶磁器生産の具体的証拠を明らかにし、二〇一二年三月二〇日にキムラン陶磁器歴史博物館が開館されました。この事業に中心となって関わってこられた西村昌也氏は残念ながら二〇一四年に交通事故で若くして亡くられました。

この博物館を後にしてハノイ市内に戻り、夕刻、ベトナム伝統芸能の「水上人形劇」を鑑賞しました。どこから人形を操っているのか初めはわかりませんでした。だんだん分かってくると、その技術の高さに驚きました。物語はベトナムの伝説などが中心で、言葉が分からなくても楽しめました。

三日目の午前中はハノイの郊外、タイグエン省タンクオン地区の茶畑と製茶工場を見学しました。この日から二日間、奈良女子大学大学院に在籍中のマイ・ティ・タン・ガーさんに研修のコーディネートと通訳をしていただきました。ハノイからのどかな水田の風景の中を片道一時間半程バスで走ると山々の斜面に茶畑が見えてきました。タイグエン省は上質のお茶を生産することで知られており、タイグエン茶はベトナム国内でも高く評価され、中国や台湾にも輸出されています。中でもタンクオン地区で生産されるタンクオン茶

はうま味の素となるアミノ酸を沢山含んでいて、特に上質なタイグエン茶としてブランド化されています。タンクオン地区にはタンクオン茶文化会館が建てられ、この地区でのお茶の栽培技術やお茶の加工方法を紹介します。会館内には快適な椅子を配置したりとしたりとした空間があり、ここではタンクオン茶を味わう事もできます。

一行がタンクオン茶文化会館についたころから雨が降り出したことを幸いに、時間をかけておいしいタンクオン茶を沢山いただきました。また、添乗員の山本明日香さんが持参してくださった台湾茶との飲み比べもあり、幸せな時間をすごす事ができました。タイグエン茶は緑茶とされていますが、製造方法にも中国の影響を受けており、実は少し醗酵させた弱醗酵茶だそうです。

雨が小降りになったころあいを見計らって、近くの茶畑と製茶工場を見学しました。雨なのでただ茶畑を見るだけか？と思っただけですが、茶摘みの方々が、私たちが歩く道の近くで茶摘みをされていました。茶葉を摘む音までも聞こえる至近の距離での茶摘みを見られた事に感激でした。ティエン・イエン製茶工場は茶畑の中にある工場でしたが、

飲ませていただいたお茶はフレッシュな香りで苦味の少ない爽やかな味でした。

午後はハノイ市内に戻って真武観を見学しました。真武観は道教のお寺で、北方を守る神様である玄天上帝が祀られています。大きく育った木々に囲まれ埋もれるように建っていて、境内では雲の切れ間から射してくる日差しを緑がさえぎってくれて、快適にお参りできました。

四日目、最終日はベトナムの茶人バクさんがオーナーを務める茶館にて日越茶文化交流がありました。館内には日越両国のお茶を見ようと沢山の人が集まり、テレビ局の取材もあり大盛況でした。先ず、熊倉功夫会長の御挨拶と日本の茶の湯についてのお話があり、次いでバクさんの御挨拶とベトナムに古くから伝わる生茶についてのお話がありました。その後、山岸多加乃さんにより薄茶のお点前のご披露があり、井上美和子さん、坂口ますみさんのお運びでベトナムの方々に薄茶を体験していただきました。

次に、バクさんが前日に摘んだ茶葉で生茶の淹れ方をご披露してくださいました。生茶は摘み取った葉を一日ほど干して、それをお湯や水につけて成分を浸出させるの

だそうですが、用いる茶葉の大きい事に驚きました。先ず、長さ二〇センチほどの厚く硬い茶葉を手のひらの中で小さく折りたんでポットに入れます。そこにお湯を入れてしばし待ち、お茶碗に浸出液を注ぎ分けます。日本の新芽を使ったお茶の香りとは少し異なりますが、新鮮なお茶の香りとはのかな甘味を感じました。



日越茶文化交流

今回の研修中の天候はずっと曇り時々雨でしたが、突然戻ってきた晴天にベトナム本来の暑さを感じながら、世界遺産の宮城跡やベ

トナム戦争時の地下秘密司令室などがあるタロン皇城を見学して研修の全行程を終了しました。

理事會

平成二十九年度第一回理事會が、十月一日（日）午後二時より同志社大学 徳照館一階會議室において行われた。理事十八名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

- 一、各担当理事より事業報告
 - 二、茶の湯の無形文化財指定について
 - 三、会誌・会報について
 - 四、平成三十年大会について
 - 五、その他
- 第一議題では、各担当理事より各地例会について、それぞれ報告が行われた。
- 第二議題では、茶の湯の無形文化財指定について、中村利則副会長より、文化庁長官に提出する「茶の湯の無形文化財指定について」の上申書が提案された。

平成三十年四月を用途に文化財保護法の改正が検討され、文化財の活用が盛り込まれよ

うとしているこの機に併せて申請していきたい。茶の湯文化学会だけでなく、他の団体と一緒に申請した方が良いのではないのかという意見に対しては、先ずは文化庁に上申し、その後の展開で他の団体や美術館などに働きかけてもらうやり方が良いのではないかと思われる。また、茶の湯の定義、広く「茶」を軸とした包括的な文化概念を考えておくべきである。マスコミ対応（プレス発表）も戦略的に実施すべきである、などの種々の意見が出された。協議会的なものへの移行も考慮し、茶の湯文化学会が軸となっていくことを考えるべきであるとした。

第三議題では、会誌について山田委員長より、二十八号の報告がなされ、また二十九・三十号の編集作業を進めていることや投稿原稿の応募状況などが報告された。

第四議題では、平成三十年大会について、中村利則先生より、日程は六月十六日（土）・十七日（日）、場所については、松平不昧公没後二百年を記念し、松江市にての開催が提案され、承認された。中村利則副会長、山田哲也理事、原田茂弘理事を中心に調整していただくこととなった。大会シンポジウムのテーマは「松平不昧の茶の湯」とし、コーディネ

ネーターは熊倉会長とする。また研究発表の発表者は三人とし、研究発表の公募は、ホームページ・会報で行い、エントリー締切りは二月十三日（火）とすることが承認された。

第五議題では、ワシントン条約（絶滅のおそれのある野生動物植物の種の国際取引に関する条約）に関わるものを材料とする茶道具（羽箒・象牙等）について、今後、規制を受ける可能性が大きくなっており、それへの対応を慎重に検討していく必要があるとの意見が出された。

第二回理事会は、平成三十年二月二十五日（日）同志社大学今出川キャンパスにて、開催することとなった。



例 会

近畿例会

（平成二十九年七月八日）

「聲」を詠む

— 頼山陽の漢詩にみる煎茶 —

島村 幸忠

江戸時代の化政期を中心に活躍した文人・頼山陽（一七八一年～一八三二年）における煎茶については、これまで尾道の門人・橋本竹下（～一八六二年）に宛てられた書簡を中心に論じられてきた。確かに、それらの書簡は、山陽による「茶の入れ方」や「茶の湯への批判」などを伝えるものであり、非常に重要な資料であるといえる。しかし、山陽が詠んだ茶に関する詩文などを考慮すれば、それらの書簡から得られる情報は、山陽の煎茶について知る上で一面的なものでしかないだろう。

本発表では、山陽の漢詩のなかでも、特に茶に関する詩（以下、「詠茶詩」とする）を取り上げ、それらに依拠しつつ、山陽における茶の意義について考察していく。山陽の漢

詩については、まず、楳村が『煎茶の世界』（一九七一年）のなかで「煎茶歌」（一八三三年〔文政六〕）を取り上げており、そこに山陽のみならず、延いては日本の煎茶文化それ自体の根底に流れる反権力的な傾向を指摘している。また、漆原が「文人煎茶の盛衰」（二〇一五年）のなかで、幾つかの詩を制作順に紹介している。しかし、そこでは内容にまで踏み込んだ考察は行われていない。また、山陽の詠んだ茶詩には、以上の先行研究では取り上げられていないものも多くあり、それらも含めて考察される必要がある。

発表では、まず、先行研究では扱われてこなかった山陽の初期の作品を取り上げ、それらのなかに「聲（音）」がしばしば登場することを指摘する（第一節）。次に、詠茶詩も含む「五聲五影詩」（あるいは、「十聲詩」）に注目し、山陽の詩の特徴を確認しつつ、そこにおいて「聲」という語が重要な役割を担っていることを示す（第二節）。最後に、「茶聲」という語が用いられている、その他の詠茶詩を取り上げる（第三節）。

(平成二十九年九月九日)

「京都出土の茶臼とそれをめぐる諸問題」

— 日本最古の茶臼とその周辺 —

桐山 秀穂

京都市の平安京左京八条三坊七町跡出土の茶臼について、その製作時期を十一世紀後半としたが、まずその茶臼と出土遺跡の概要を紹介し、茶臼の製作時期について説明した。またその茶臼を十一世紀後半の製作とした場合、それを中国製としたが、①その日本への伝来時期とその荷担者の問題、②平安時代後期での京都での喫茶の問題、③『喫茶養生記』の解釈をめぐる問題の三点について検討した。まず、前述の平安京跡出土の茶臼は、挽木座に中央円形の蓮華文が施された茶臼であり、蓮弁の形態が平等院鳳凰堂前の石灯籠台座に近似することから、十一世紀後半に位置づけられるとした。そして茶臼のつくりの精巧さについて日本で製作された茶臼との技術的な差異が大きいことを指摘し、中国で作られた可能性が極めて強いとした。その上で、①の点について十一世紀後半に新品を輸入した可能性と、後の時代に中古品を輸入した可能性があるが、茶臼の場合、重視された道具ではないこと、新安沈船では新品が出土して

いることから、十一世紀後半に新品が輸入された可能性が高いとした。そしてその荷担者として、当時の日宋貿易の中で伝来したはずで、その中で成尋の例をあげ、入宋僧など仏教に関係する可能性を考えたいとした。ただし当時の京都の喫茶を示す史料では、茶臼の存在をうかがい知ることは難しく、抹茶の存在を示す確実な史料は、現在では鎌倉時代に入ること示した。また、『喫茶養生記』については、従来ここに記された抹茶は茶研で作られたという考え方があったが、茶臼で作られた可能性も高くなったとした。



例会のご案内

東京例会

平成三十年二月二十四日(土) 午後二時

(会場：根津美術館)

「紀州徳川家の菓子木型について」

鈴木 愛乃

「日本における『茶経』の受容」岩間真知子

静岡例会

平成三十年(開催予定)

(会場：静岡産業大学情報学部藤枝駅前)

キャンパス(愛称VIVI ビビ)一階)

「寿ぎの茶 正月に因み、

目度合い場面で使われる茶について」

中村羊一郎

会費 千円(お茶・お菓子・資料)

共催 静岡産業大学地域学研究セン

ター・世界緑茶協会

(日程が決まり次第、ホームページにてお知らせいたします)

東海例会

平成三十年一月二十七日(土)

午後一時半～三時

(会場：浜松市茶室「松韻亭」)

浜松市中区鹿谷町一―四

TEL053-473-4310)

「永井直勝・尚政と小堀遠州」 深谷 信子

北陸例会

平成三十年三月十七日(土)午後二時～(予定)

(会場：越前古窯博物館)

「越前古窯と

『水野九右衛門コレクション』について」

越前古窯博物館の見学

金沢例会

平成三十年三月二十四日(土)午後一時半～

(会場：近江町交流センター)

「岡倉天心『茶の本』について」 田中 秀隆

高知例会

平成三十年二月四日(日)午前十時～正午

(会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「新図書館における茶書の調査」 小松 聡

茶席 茶の湯文化学会の研究成果を実践

する。茶の湯を一般の方々親子
んでもらうため「床飾り」「道具
立て」はするが、お点前はお客次
第として楽しめる茶席を設ける。

時間 午前十時～午後四時

開催予定日

高知新聞「こみゅっと」に掲示

会費 三百円

会場 高知県立文学館 慶雲庵茶室



平成三十年度総会・大会を左記の日程で現
在計画中です。詳細は平成三十年四月に郵送
にてご案内いたします。

日程

平成三十年六月十六日(土)

見学会 有沢山荘菅田庵(修理工事中現
場の見学)

懇親会

六月十七日(日)

総会・大会

開催地：島根県松江市



平成三十年度の研究発表者を募集します。
発表を希望される方は、八百字程度の要旨を
添えて、学会事務局までメールもしくは郵送
でご応募下さい。大会終了後、発表内容をペー
スとして論文にまとめ、会誌『茶の湯文化学』
に投稿していただけるような発表をお待ちし
ております。

開催日程：平成三十年六月十七日(日)

応募資格：茶の湯文化学会会員であること

募集締切：平成三十年二月十三日(火)

発表時間：研究発表三十分 質疑応答十分

- ・メールでの応募の場合は、件名を「平成三十年度大会発表募集」として下さい。
- ・応募の際は連絡先のほか、現在の所属先、肩書等もあれば、併せてお知らせ下さい。
- ・応募多数の場合は、審査の上決定いたし

ます。

・その他ご質問等ございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。



お知らせ

計報

幹事の瀬戸元様が十月十八日にお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

新刊案内

* 『日本茶の近代史 幕末開港から明治後期まで』 粟倉大輔著 蒼天社出版 (定価五、八〇〇円＋税)

幕末開港後、居留地における茶再製技術により産業化、輸出化が進み、それは港湾、鉄道の資本整備など、生産地の人々にも大きな影響を与えた。

* 『宇治茶と上林一族』 上林春松・上林秀敏著 宮帯出版社 (定価一、七〇〇円＋税)

利休・織部ら大茶人に重用され、幕府・諸大名の御用を務めた上林家の歴史を解説。

* 『茶の湯釜 その歴史と鑑賞』 長野埜志著 宮帯出版社 (定価二、七〇〇円＋税)

釜研究の第一人者で長年和銃(わずく)を用いて釜を制作してきた著者が、茶の湯釜について、初心者にもわかりやすく解説。

* 『永井尚政 数寄に通じた幕府の重鎮』 深谷信子著 宮帯出版社 (定価二、七〇〇円＋税)

文治の才と教養を生かして幕府を支えた能臣と、寛永期文化人たちのネットワーク。

* 『松平不昧の茶室 不昧が求めた茶の湯の空間』 和田嘉有著 松江市歴史まちづくり部史料編纂課発行 (定価八〇〇円＋税)

松平不昧好みの茶室、大崎園下屋敷、大崎園の茶室、『大円庵会記』に見る不昧の茶室、など。

※年会費未納の方は、至急お払込み下さいますよう、よろしくお願いいたします。

